国際協働によるオンライン ASEAN 研修実践

- コロナ禍における国際交流に関する学修機会の確保にむけて -

吉田知加 [1,a)]　清水一彦 [1]　櫻井淳 [1]

概要： 2020 年度は Covid-19 の影響により，企画していた海外現地研修の実施が見送られる中で，文教大学情報学部国際交流委員会では，オンラインによる海外研修を協定校であるベトナム FPT 大学と企画し実践した．その研修は，文教大学の学生以外にベトナム，タイ，インドネシアの大学の日本語学科の学生により構成され，アジア諸国の文化・慣習の理解と交流を目的とした，初めての日本語によるオンライン研修となった．プログラムは週末の 4 日間で実施され，国別の学生チームの発表のみならず，各国からの参加者により混合で構成されたチームによるディスカッション，ディベート，日本語授業等ユニークなプログラム構成により遂行された．本研究では，その研修プログラムを報告すると共に，研修直後実施の調査からオンラインによる国際交流研修の有用性を確認し，その可能性と課題を考察する．この研究成果が，オンラインによる国際交流研修企画へ貢献できることと，今後この様な危機的状況下でのオンライン研修実施を計画する他大学への参考となることを目的とする．

キーワード：オンライン研修，異文化交流，アジア 4 カ国大学生，Microsoft Teams，日本語による研修

Online ASEAN Study Tour through International Collaboration

To Secure International Exchange Learning Opportunities amid The Covid-19 Pandemic

CHIKA YOSHIDA [1,a)]　KAZUHIKO SHIMIZU [1]
JUN SAKURAI [1]

Abstract: In place of the scheduled overseas study tour that was cancelled due to the Covid-19 pandemic in fiscal year 2020, the International Exchange Committee of the Faculty of Information and Communications, Bunkyo University, planned and implemented an online overseas study tour in collaboration with its partner university, FPT University, Vietnam. Other than students from Bunkyo University, the program participants were students enrolled in the Japanese language departments of universities in Vietnam, Thailand, and Indonesia. It was the first online study tour to be held in the Japanese language with the aim to foster interaction and understanding on the culture and customs of other countries of Asia. The online tour was held over two weekends, for a total of four days, with a unique program that included not only presentations by student teams from each country, but Japanese language classes and discussions and debates among teams composed of a mixture of members from the four countries. In this study, we report on this online study tour, confirm the effectiveness of online international exchange study tours through a survey conducted immediately after the program was held, and examine their potential and challenges. We hope that the results of this study will contribute to the planning of online international exchange study tours and will be informative to other universities planning to implement online study tours under such critical situations.

Keywords: Online study tour, Intercultural exchange, University students from four Asian countries, Microsoft Teams, Study tour in Japanese

©2021 Information Processing Society of Japan

1. はじめに

2020 年 1 月 30 日の世界保健機関（WHO）は中国から広がっている新型コロナウィルスについて緊急事態を宣言した．そこから政府によるコロナ禍による全世界的な渡航制限が開始され，それにより，これまで各大学が取り組んできた海外留学，外国人留学生の受入れ等を通じた大学のグローバル化に向けた活動は大きな影響を受けている[1][2].

文教大学では海外研修について，全校から募る 2 つのオープンプログラムと，各学部の国際交流委員会によって推進されるクローズドプログラムを推進してきた．各学部の推進するクローズドプログラム数を数値で示すと，教育学部（2），人間科学部（1），文学部（16），情報学部（2），国際学部（4），経営学部（2）の計 27 プログラムである．

そのうち筆者らの所属する情報学部では，ベトナム FPT 大学（以降 FPT 大学）とモンゴル国立科学技術大学（以降 MUST）を協定校として，2 プログラムを担当し，FPT 大学には毎年 3 月初旬に 1 回，MUST には，1 年または 2 年に 1 回の頻度で学生の海外研修を実施してきた． それら研修参加者については，学内規定のなかで授業履修と同様な単位付与が可能となっている．

2020 年 4 月，筆者らは文教大学情報学部の国際交流委員として任命され，全学の組織である国際交流センターと，海外協定校との連携プログラムを推進するミッションで活動を開始していた．しかし 2019 年 12 月に中国武漢で確認された新型コロナウィルスは 2020 年 1 月に日本上陸が報じられ，3 月 8 日から 8 日間で予定していたベトナム研修を中止しており，4 月 7 日には本学部のある神奈川県でも緊急事態宣言が出される状況にあった．

当時はこの新型コロナウィルス感染がここまで拡大することを想定しておらず，早期終息を見越した年度計画推進を検討していた．ところが，その後新型コロナ感染は，世界中に拡大し，秋学期に入るころは，終息するどころか，世界各国での水際対策のもとに入出国規制が強化されるまでに至っていた．国際交流委員会では，2021 年 3 月に計画していた FPT 大学とのベトナム研修実施の可否の決定の時期となり，9 月 18 日時点の外務省発出の感染症危険度が「レベルが 3」であることに準じて実施は不可と判断された．ベトナム研修は 2020 年 3 月にも中止・延期としている．委員会では学生の海外交流に関する学習機会が継続的に逸することを懸念していたところ，FPT 大学からオンライン研修の共同実施提案があり，学内検討のステージに進めた．

学内稟議のなかで，オンライン研修を従来の海外短期研修と同等に位置づけるかの議論があったが，既にオンライン研修で単位を付与している大学の事例があることと，文科省（2020）「大学等における新型コロナウィルス感染症への対応ガイドラインについて」に準拠し,その学習機会の確保の視点で，単位付与が認められた[3][4][5].

本研究では，そこで FPT 大学と共同実施に至ったオンライン文化交流研修プログラムを報告すると共に，研修直後実施の調査からオンラインによる国際交流研修の有用性を確認し，その可能性と課題を考察する．また，この研究成果が，今後オンラインによる国際交流研修を企画される方々への貢献となることを目的としている．

この論文の構成は，次の通りである．まず，2 章では，先行研究として，オンライン異文化研修のこれまでの事例とともに，この度の Covid-19 の大学での主に文化交流教育事業への影響と対応に関わる文献を確認する．3 章では，実施した「オンライン ASEAN 研修」について述べる．4 章では，そこで参加者に実施したアンケートをもとにその分析結果を報告する．5 章でそのオンライン研修についての考察と施策について述べ，6 章では今後の課題を述べる．

2. 先行研究

本章では，これまでに報告されたオンラインによる異文化教育や，Covid-19 による教育や国際交流活動への影響と対策についての報告を整理し，本研究での取り組みと目的を明確にする．

2.1 オンラインによる異文化教育

小玉（2018）では，米国西海岸のカリフォニア州立大学サンノゼ校でのオンラインによる異文化間協働型の日本文化の授業 COIL(Collaborative Online Interactive Learning)を紹介している[6]．COIL は「少なくとも 2 つの文化圏の学生の集団が，オンラインで共有された学習環境で，それぞれの文化圏を本拠地とする教師の監督のもと一緒に学習すること」であり，これも物理的に離れた地域にいる学生と教員をオンラインツールでつなぎ，グローバルな意識や理解を深めることにあるとしている．この背景には，日本企業からの求人の増大や就職希望者の増加という日米間での文化交流が主体とされており，対象とする学生も日本語学科の学生であるという本研修との共通点がある．授業での使用言語は，日本語と一部英語で実施されている．学習期間としては，ＣＯＩＬは，授業として１セメスターにわたり実施されるものであり，短期研修という位置づけからは外れる．

赤崎（2021）では，Covid-19 により開始さえた大学オンライン授業のなかで，特に異文化トレーニングの初級授業を分析することによりその問題点を分析している．これは，Covid-19 の影響下で余儀なくされたオンライン教育という

1. 文教大学
Bunkyo University, Namegaya 1100, Chigasaki, Kanagawa 253-855, Japan
a) cyoshida@bunkyo.ac.jp

©2021 Information Processing Society of Japan

点で今回の研修との共通根が得られることと，インターネット環境下での教育支援ツール使用時の問題を取り上げている点での類似性はある．しかし，研修ではなくこれもセメスター単位で実施される「授業」であること，対象を日本人学生としているところで，アジア 4 カ国の大学生による短期研修を取り上げた本研究との位置づけは異なる[7].

2.2 Covid-19 の大学国際交流活動への影響と対応

JASSO（2021）は，コロナ禍での各大学の国際教育交流の取り組み事例を「コロナ禍で拡大したオンラインを活用した国際教育交流事例」として公開している[8].

これによれば，短期（1 週間から 2 か月未満）国際教育では，14 の国公立，私立大学がオンライン研修を実施しており，そのうち日本人学生のみを対象とした研修が 7，海外学生を対象としたものが 5 だが，いずれもプログラム概要として語学学習を主とした研修となっている．

さらに，国内，海外の学生を対象としたプログラムは，他大学の聴講や学生との交流をプログラムとしているが，主たる言語は英語で行われているため，一定の英語力が要求されるとみられる[8].

このような状況を鑑み，国立大学協会（2021）では，同協会の国際交流委員会議事録として，「コロナ禍を契機として考える今後の国際交流の在り方について」を纏めている．そこでは，「これまでの対面型の授業，国際的な学生交流に加えて，デジタル技術を活用した新しい形態の学修の有用性が顕在化するとともに，新たな潮流の一つになりつつある．」としている．そこでは，コロナ禍においてオンライン留学，研修のメリットが再認識されたとして，次の点をあげている[1].

・海外の学生とのディスカッション等を含む授業実施などへのハードルが下がったこと，
・家計の状況に関わらず，海外の学生との共修環境を構築することが容易になったこと，
・就職時期や自大学のアカデミックカレンダーに影響されずに海外大学の授業を履修できること，
・対面の留学前の事前教育にも組み合わせ，活用するなど，国際交流の形態の多様化を生み出せること，

一方，デメリットとしては，時差の関係から，海外大学と同時に授業を実施する対象がアジア圏中心となり，国の多様性が限定されることを挙げ，オンデマンド型の検討を課題としている．アジア 4 カ国で実施した本研修は幸いこの時差のデメリットは少なかったが，リアルタイム実施では不可避の課題とされる．

これら先行研究での問題認識を踏まえて，本研究ではアジア 4 カ国の大学生を対象とした日本語での文化交流プログラムの成果と課題を明らかにすることを目的とする．

3. オンライン ASEAN 研修

本章では，今回実施したオンラインによる海外異文化研修「オンライン ASEAN 研修（英語では”Virtual ASEAN Study Tour”）の目的，プログラム，そしてスケジュールとプログラム終了までの推進プロセスを報告する．

3.1 本研修の目的

この度の「オンライン ASEAN 研修」の目的は，新型コロナ感染拡大で実施が不可能となった現地での海外研修に代わる学修機会を学生に対し確保することである．

オンラインによる異文化交流海外研修を学内で合意を形成する上で，以下の 6 項を基本的考え方として提示した．

・文科省（2020）に準じて，今年度に限り国際交流に関する学修機会を確保することを優先した学部としてのプログラムとして企画・実施する．
・実施時期は，2020 年度内　（2021 年 3 月第一週を検討）とする．
・単位付与は，予定させていた現地海外研修同様に 2021 年度の海外研修 A・B の単位として認定を可能とする．
・プログラムは，ベトナム FPT 大学との共催で，日本語によるアジア異文化交流をテーマとする．
・プログラムに参加する文教大生は，授業の一環として事前・事後の研修を受講する．

研修費用は，既存規定に基づき学生から参加費を徴収している．この様な研修費用の支払い方法は,本来学生が出校し，事務棟販売機より収入証紙を購入し支払い,それを纏めて主催校に支払うことになる為,このコロナ禍で現実的に難しい．そこで，請求書送付のコンビニ決済を含む入校不要の手続きで支払方法を考慮する．また，海外送金に関わる手数料は学部予算の適用を検討する．

これらは，教授会において意義を説明の上，意見を諮り，全員から承認を頂くことができた．なお，使用言語を日本語としたのは，「異文化交流」を目的とし行う上で，語学力が障害とならぬ様，考慮し検討したものである．

3.2 研修内容とプログラム

プログラムは，FPT 大学の事務局である FPT グローバルの代表者とメールおよび幾度かの Zoom や Google Meet での会議で企画された．そして最終版研修内容とプログラムが以下の通り決定した．

企画の過程で， 参加国はタイ，ベトナム，インドネシアの大学に決定し，実施日については，それら大学のアカデミックカレンダーがそれぞれ異なるために，一週間通しての研修の実現が難しく，3 月の週末土日で 2 回に分け実施することになった．

【最終版　研修内容】
・プログラムの目的：アジア 4 カ国（ベトナム，タイ，インドネシア，日本）の異文化交流
・主 催 大 学：FPT 大学（ベトナム）・　文教大学（日本）
・参 加 大 学：文教大学の学生，　FPT 大学　日本語学科の学生，ランシット大学他（タイ）日本語学科の学生
ビーナス大学他（インドネシア）　日本語学科の学生

・使 用 言 語：主に日本語　（一部，英語）
・研 修 時 期：2021 年　3 月　6 日（土）・3 月 7 日（日）
3 月 20 日（土）・3 月 21 日（日）
（土・日）2 回　（6 時間/日　3 日間　最終日のみ 7 時間）
・実 施 方 法：オンライン（M/S Team）
・事 前 研 修：オンライン（Zoom）で 3 回実施．
第一回 2 月 5 日（金） 3 限，第二回 2 月 12 日（金） 3 限，第三回 2 月 26 日(金) 3・4 限

【最終版プログラム】

プログラムは，表 1 に示すように，大きく二つに分けられている．ひとつは，テーマに応じて参加国別チームが作成したパワーポイントスライド (.pptx) や，音声を入れたビデオ (.MP4) を発表し合う Big Group Activities （以降 BGA，表 1 オレンジの領域）である．このプログラムでは Microsoft Teams（以降 MS Teams）上に設定された一つのルームに全員が参加し行われる．

ここでは，FPT 大学のコーディネーター一名が日本語で司会進行を行う．もう一つは，各国からのメンバーによる混合グループで意見交換や討議を行う Small Group Activities（以降 SGA，表 1 黄色の領域）である．SGA では MS Teams 上に予め作成された別々のルームに分かれて参加し行われ，そこでは各ルームに FPT 大学のコーディネーターが 1 名ずつアサインされ，日本語で司会進行をすることになる．開会式，閉会式，および VIP 講演会はグループ発表や討議ではないが，MS Teams 上の一つのルームに集合し実施されるため，表 1 では濃いオレンジの領域として示している．

フレンズラウンジは，参加者の準備の負荷を考慮し，研修日毎に各国が自国の文化を発表するイベント（BGA）として計画された．

最終版研修内容とプログラム決定後，参加者募集が行われ，文教大学情報学部はじめ，各大学から参加者の参加者が決定した．以下がその内訳となる．

・文教大学情報学部　16 名（内訳：情報システム学科 11 名 情報社会学科 4 名，メディア表現学科　1 名，）
・インドネシア　ビーナス大学他　5 名，
・タイ　プリンス・オブ・ソンクラ大学他　4 名，
・ベトナム FPT 大学　4 名　計 29 名

3.3 スケジュール

プログラムを実施する上ではスケジュールの詳細を決定する必要がある．FPT 大学は，研修資料の作成，講演を依頼する 2 名の講師の選出ならびに，タイ，インドネシアの参加協定大学への案内とスケジュール調整，参加者募集を担当し，3 月 6 日の研修開始までのスケジュールを共有し確認しながらの作業になった．

文教大学，FPT 大学間は研修実施まで 78 メールの送受信と Google Meet または Zoom での定期的な 2 週に 1 回のミーティングで進捗状況の確認や問題点を共有していった．

3.4 確認書　（Letter of Confirmation）

FPT 大学は，文教大学の協定校であり，これまでの研修他，短期留学生の交換など基本協定書のもとに推進している．それに加え，この度の研修遂行は，研修費用（US $ 1,200）の支払い内容の確認も含め“Letter of Confirmation” を取り交わし行われた．同書類は，FPT Global Associate Dean ，Ms. Hien Nguyen と，文教大学情報学部長である釈氏孝浩教授の

表 1　オンライン ASEAM 研修プログラム
Table1. On-line ASEAN Training Program “Virtual Study Tour”

		3月6日(土)	3月7日(日)	3月20日(土)	3月21日(日)
	時間(分)	国と人々	文化	教育	国際化
午前	30	開会式とプログラム紹介	モーニングコーヒー フリーディスカッション	モーニングコーヒー フリーディスカッション	モーニングコーヒー フリーディスカッション
	60	他国の人への自己紹介 「私の周りの人達」	他国の人への自己紹介 「私の好きな物」（英語）	他国の人への自己紹介 「私の大学」	他国の人への自己紹介 「私の志望する進路」
	15	休憩　（移動）			
	60	文化発表会 「私の国の興味深い事」	文化発表会 「伝統的な衣装と料理」	文化発表会 「私の国の教育システム」	VIP講演会（2名） ・FTP 株式会社　役員　Mr. Khoo ・侍日本語センター　杉本先生
	30	オンライン・ツアー 「街巡り」	オンライン・ツアー 「ファッションショー」	オンライン・ツアー 「キャンパスツアー」	
午後	60	ディスカッション 「海外旅行」	ディスカッション 「私の国でしてはいけない事、しなければいけない事」	ディスカッション 「大学教育の是非」	ディスカッション 「国際的な活動」
	75	フレンズラウンジ 伝統舞踊に挑戦	フレンズラウンジ カラオケの日	フレンズラウンジ ベトナム料理教室	フレンズラウンジ アジアの言語
				* 使用言語は基本的に日本語	閉会式

… 全員同一サイトに参加し実施
… 全員同一サイトに参加し、各大学のグループ、または代表グループが発表
… 他国の学生との混合グループを編成し、グループ毎に分かれて発表（グループワークセッション）

©2021 Information Processing Society of Japan

サインで 2021 年 1 月 28 日付にて締結された.

3.5 オンライン研修状況

3.5.1 事前研修

研修に参加する文教大学生に 3 回にわたり事前研修をオンライン研修として実施した. 研修はコースとして, manaba（教育支援システム）上に設定し, 事前研修当日は Zoom にてリアルタイムで授業を行った. 内容は以下のとおりである.

第一回　2/ 5（金） 3 限 研修概要説明, BGA の発表準備 MSTeam で実施する上での注意など

第二回　2/12（金）3 限 SGA の個人発表準備

第三回　2/26（金）3・4 限　BGA のリハーサル

参加者数は　第一回 16 名, 第二回 15 名, 第三回 13 名で, リハーサルでは発表者に委ね欠席する学生がみられた.

授業後は個人レポートの提出を課し, プレゼンテーションファイル（.PPTX）やビデオファイル(.MP4)の提出も manaba サイトにアップロードを原則とした.

3.5.2 オンライン ASEAN 研修

4 日間にわたり実施された研修は, 3 月 6 日(土)に開催された開会式で開幕した. そこでは, 参加 4 カ国の代表者から挨拶が行われ, 司会進行からの関係者の紹介とともに MS Teams のスクリーン上でも荘厳さが伝わる音響効果と巧緻な環境準備が施されていた.

MS Teams による実施のため, 予め各参加者にはメールアドレスに 3 種の招待状が送付された.　1 つは国別グループ発表のプログラム用（BGA）, 1 つは, 各国からの混合グループによるプログラム用（SGA）で参加者はそれぞれ, その URL から自分のグループサイトに入室できた. そして残りの 1 つは, 事前のフリーディスカッションなどに使う連絡用サイトの招待状として用意されたものだったが, 文教大学の授業は Zoom または Google Meet で実施する為, 学生が MS Teams に対する知識経験がなく, 特に連絡用サイトは十分に使っていたとは言い難い状況だった. しかし, MS Teams によるオンライン研修への慣れは想定した以上に早く, 研修ではシステムの混乱やトラブル無く実施された.

各国グループ別のプログラム（BGA）での文化発表会はグループ代表または全員が発表し, オンライン・ツアーはその準備として予め提出されたビデオファイル（.MP4）を再生し, 参加者はそれらを視聴する形で進められた.

各国からの混合グループによるプログラム（SGA）では, FPT 大学のコーディネーターが, 各グループのリーダーとして 6 名アサインされ, 進行した. ここでは, 各コーディネーターが日本語で進行した. ただし, 彼らの日本語能力レベルは一律ではなく, グループの進捗の差異や参加者の討議への積極的参加に対する影響がなかったとはいえない.

また, フレンズラウンジでは, 各国の代表的文化の披露が行われ, タイ学生による民族舞踊やベトナム料理の実践, 日本の学生による日本語（近畿地方方言など）教室, インドネシア学生のカラオケが行われた. ベトナム料理実践は, コーディネーターのリードがビデオのみであった為, 参加者はレシピ―による個人作業となったことを除いては, 参加者の積極的な参加意欲を画面からも推察できるプログラムであった.

ゲストスピーカーによる VIP 講演会では, FPT 大学のグループ企業である FPT ソフトウェアからカスタマーリレーション部門の Executive Manager, Mr. Nguyen Tuan Viet, また, ベトナムで日本語学校を経営される杉本麗次先生の 2 名の講演が行われた.

4. アンケート調査と分析結果

本章では, 4 日間にわたって実施したオンライン ASEAN 研修の参加者のアンケート調査・集計結果および相関分析で得た結果を報告する.

4.1 調査対象と実施方法

オンライン ASEAN 研修最終日である 3 月 22 日には, 参加者に対して今回の研修の各プログラムの理解とオンライン研修の成果と認識に関するアンケート調査を実施した. アンケートの目的は, オンラインによる異文化研修の各プログラムでの理解と研修を通じて得られた成果に対する受講生の見解・満足度を把握することで, オンライン異文化研修の今後の適用と改善に繋げることにある.

アンケートは, 4 日間の全プログラムに参加した受講者であるインドネシアの大学生 5 名, タイの大学生 4 名, ベトナム FPT 大学の大学生 4 名, そして文教大学生 16 名の計 29 名を対象とした. 実施方法は, Google Form　（オンライン）の URL を各受講生の E メールアドレスに配布し, 各参加者が回答後送信したものを回収した.

4.2 調査項目と集計結果

質問項目は, 基本項目 4 項目（氏名・E メールアドレス・国籍・大学名）と各プログラムに関する理解に関する質問項目 9 項目, 研修全体についての見解に関わる質問項目 10 項目から構成し作成した. 基本項目を除く質問項目は 5 リッカード法での選択式とし, 集計数値からの客観的視点で評価するため, テキスト回答を要するオープンクエスチョンは組み込んでいない.　表 2「オンライン ASEAN 研修質問項目表」にアンケートで使用した質問項目と 5 段階数値による対象者の平均値を示す. 平均値は, 日本人, 日本人以外, そして全員の 3 グループで求めている. 平均値が 3.5 以上の項目は赤で色掛けしており, 緑の色掛けは 3.0 未満である.

全体に日本人学生の採点基準が 3.38 と他国の学生の 3.08 より数値が高く, 各プログラムは, ディベートを除き全体に平均値より高く評価されている. 研修全体では,「このオンライン研修で他文化理解が深まりましたか？」の全体での平均値が 3.52 であったが,「対面の研修よりも相手の話を理解し易いですか」の平均値は全体が 2.34 と最も低い数値を示した. さらに,「今後もオンライン研修に参加したいと思

©2021 Information Processing Society of Japan

います」では全体の平均値が 3.17 と「どちらともいえない」回答が多かったことがわかる．

4.3 相関分析

表 2 の統計表では各項目に対する日本人学生，日本人以外の学生，そして全体の評価が確認できた． つぎに，2 つのデータの関係性の強さ，つまり A 項目の評価値が高い人は，B 項目の評価値も高いといった項目間評価の傾向を確認するため相関表を求めた．表 3 にそれを示す．

相関表での値は，より”1”に近い値が，正の相関があるとされる．ここでは赤が濃いほど相関が高く，1.1 と 1.2 は“0.778”であり，文化発表会を「理解できた」（4. または 5.）と回答した人は，オイライン・ツアーも「理解できた」（4. または 5.）と回答していることがわかる． 同様に，2.7 は 1.1 とは”0.677”であり，3.6 とは”0.649 である．フレンズラウンジのアジア言語 101 日本語を「理解できた」(4. または 5.) と回答した人は，文化発表会も「理解できた」(4. または 5.）と回答し，さらに「この研修で他文化の理解が深まりましたか？」について「そう思う」（4. または 5.）と回答していることがわかる．

一方，青の色掛けられた項目は相関が低いとみられ，例えば 2.2 と 3.6 は,”-0.12”であり，負の相関を示している．これは，2.2 ディベートを「理解できなかった」(1. または 2.）と回答した人が，「この研修で他文化の理解が深まりましたか？」について「そう思う」（4. または 5.）と回答していることが示されている．同様に 3.5 と 3.8 は，”0.194”であり，「共通語として英語を話すことが必要だ」について「そうと思わない」（1. または 2.）と回答した人が，「母国語が異なる 4 カ国の学生の研修は，2 カ国の学生の研修よりも異文化

表 2　オンライン ASEAN 研修質問項目表

Table 2.　Online ASEAN Training Questionnaire

区分	質問項目	平均値 日本人	日本人以外	全体	回答方法
基本項目	(1) 氏名 (2) E-Mailアドレス (3) 国籍 (4) 大学名				直接入力
各プログラム	1. 国別グループイベント (1) 文化発表会	3.69	3.15	3.45	5リッカード法 (1) 全く理解できなかった (2) 理解できなかった (3) どちらともいえない (4) 理解できた (5) とても理解できた
	1. 国別グループイベント (2) オンライン･ツアー	3.81	3.15	3.52	
	2. 各国混合グループイベント (1) 共有	3.63	3.46	3.55	
	2. 各国混合グループイベント (2) ディベート：大学教育 賛成か反対か	3.13	2.85	3.00	
	2. 各国混合グループイベント (3) Discussion - Except Debate（ディベート以外のディスカッション）	3.63	2.92	3.31	
	2. 各国混合グループイベント (4)フレンズラウンジ 伝統舞踊に挑戦	3.75	3.23	3.52	
	2. 各国混合グループイベント (5) フレンズラウンジ カラオケの日	3.81	3.54	3.69	
	2. 各国混合グループイベント (6) フレンズラウンジ ベトナム料理教室	3.69	3.38	3.55	
	2. 各国混合グループイベント (7) フレンズラウンジ アジアの言語101 日本語	3.69	3.69	3.69	
研修全体	3.(1) 実際に海外に出かけていく研修旅行より多くの準備が必要だ	2.75	2.77	2.76	(1) 全く必要はない (2) 特に必要はない (3) どちらともいえない (4) 必要だ (5) とても必要だ
	3.(2) 通常の研修旅行より相手の話を直ぐに理解する必要がある	3.19	3.08	3.14	
	3.(3) 通常の研修旅行に比べて自分の意見を積極的に話すことが必要だ	3.06	2.92	3.00	
	3.(4) いつもよりわかりやすく論理的な日本語を話す必要がある	3.63	2.92	3.31	
	3.(5) 共通語として英語を話すことは必要だ	3.00	2.23	2.66	
	3.(6) この研修で他文化理解が深まりましたか？	3.56	3.46	3.52	(1) 全くそう思わない (2) 特にそう思わない (3) どちらともいえない (4) そう思う (5) とてもそう思う
	3.(7) この研修プログラムを海外に出かけて対面で参加したら、今回のバーチャル研修より効果があるとおもいますか？	3.31	3.23	3.28	
	3.(8) 母語がことなる２か国より母語がことなる４か国の学生との研修のほうが、他文化理解に効果がありましたか？	3.31	3.15	3.24	
	3.(9) 今後もオンライン研修に参加したいと思いますか？	3.25	3.08	3.17	
	3.(10) 対面の研修よりも相手の話を理解し易いですか？	2.44	2.23	2.34	
		3.38	3.08	3.25	

表 3　相関分析表

Table 3.　Correlation Analysis Table

	1.(1)	1.(2)	2.(1)	2.(2)	2.(3)	2.(4)	2.(5)	2.(6)	2.(7)	3.(1)	3.(2)	3.(3)	3.(4)	3.(5)	3.(6)	3.(7)	3.(8)	3.(9)	3.(10)
1.(1)	1.000																		
1.(2)	0.778	1.000																	
2.(1)	0.398	0.388	1.000																
2.(2)	-0.101	0.151	0.382	1.000															
2.(3)	0.385	0.473	0.704	0.471	1.000														
2.(4)	0.248	0.471	0.635	0.602	0.602	1.000													
2.(5)	0.446	0.513	0.236	0.293	0.451	0.624	1.000												
2.(6)	0.052	0.359	0.080	0.542	0.269	0.610	0.639	1.000											
2.(7)	0.677	0.542	0.623	0.127	0.556	0.447	0.589	0.236	1.000										
3.(1)	-0.086	-0.018	-0.057	0.307	0.125	0.121	0.259	0.187	0.166	1.000									
3.(2)	0.429	0.293	0.245	0.197	0.393	0.293	0.541	0.236	0.621	0.362	1.000								
3.(3)	0.432	0.216	0.235	-0.036	0.276	0.108	0.236	-0.045	0.479	0.396	0.635	1.000							
3.(4)	0.334	0.131	0.428	0.111	0.439	0.466	0.391	-0.045	0.340	0.245	0.472	0.558	1.000						
3.(5)	0.523	0.462	0.323	0.332	0.275	0.417	0.192	0.246	0.225	0.128	0.264	0.324	0.373	1.000					
3.(6)	0.659	0.474	0.367	-0.120	0.181	0.203	0.351	-0.021	0.649	0.090	0.563	0.452	0.357	0.336	1.000				
3.(7)	0.320	0.227	-0.027	-0.156	-0.024	-0.126	0.042	-0.118	0.186	0.286	0.319	0.378	0.197	0.133	0.413	1.000			
3.(8)	0.342	0.097	0.087	-0.140	0.109	0.027	0.325	0.008	0.372	0.288	0.333	0.451	0.303	-0.194	0.368	0.442	1.000		
3.(9)	0.108	0.148	0.549	0.163	0.441	0.454	0.318	0.114	0.432	0.308	0.159	0.175	0.247	-0.121	0.104	0.221	0.387	1.000	
3.(10)	0.066	0.036	0.352	0.287	0.291	0.381	0.196	0.197	0.115	-0.068	0.191	0.123	0.188	0.245	-0.112	-0.093	0.024	0.430	1.000

©2021 Information Processing Society of Japan

理解に効果がある」について「そう思う」(4. または 5.) と回答していることがわかる.

4.4 調査結果と確認事項

この調査結果から, 確認できた内容を整理する. まず. アンケート集計では, 日本人学生の平均値より他国の学生の値が低く, 全体により厳しく評価していることがわかる. 特に日本人学生は, 各プログラムに対しての質問項目では, ディベート以外すべて 3.65 以上の評価としており, 平均でも 3.65 と高い評価をしているに対して, 日本人以外の学生では, ディベートを含むディスカッション項目で 3.00 未満と平均値を下回り, 十分理解したとは言えないという回答がされている. 例え日本語学科の学生であっても, 全て外国語である日本語で行われた研修では, 理解が容易ではなかったところもあることが推察される.

日本人以外の学生からの評価では, 日本人学生による近畿地方方言や敬語などを教えることをテーマとした「アジアの言語 101」が 3.69 と最も高かったことは, 日本語に対する関心の高さに加え, 日本語であっても講義や発表の受講を主体とするプログラムでは. 高い理解が得られることが確認できる.

研修全体については,「他文化の理解が深まった」が, 参加者全員の平均値として 3.52 と高い数値で回答されているものの,「今後もオンライン研修に参加したい」の平均値は, 2.34 と質問項目の中で最も低い数値に留まっている.
また, これは 2.1 の各国混合グループで各メンバーの趣味や考え方を共有しあう「共有」や, 2.4 「ディベート以外のディスカッション」と比較的高い相関があることから, オンライン研修では日本語で他国のメンバーと意見や考え方を交換し, 相互に理解することについては, 対面研修より難しいと感じた学生が多いと考えられる.

一方, 各国のグループに分かれて行う,「文化発表会」と「アジアの言語 101」の「他文化の理解が深まった」との値が 0.659, 0.649 と高いことは, 特に相互の意見交換を主体としない発表や受講形式のプログラムでは文化を理解できたと感じた学生が多いことが言える.

これらよりオンラインによる国際交流研修においては, 相互の意見交換を主体としないプレゼンテーションや受講形式のプログラムの有用性を確認できるものの, 他国のメンバーと意見や考え方を交換し, 相互に理解し合うというインタラクティブなプログラムにおいては, その有用性に課題を残すことが確認できた.

5. 考察

本章では, 本オンライン研修の実施状況, 参加者の調査結果を顧みて, 大学生を対象としてオンライン研修の有用性と課題, そして新しい国際交流を目的とした研修の在り方を考察する.

今回の研修は, これまでの現地への渡航を伴う海外研修を実施できない状況下において, その海外学修機会を確保するという目的のもとに, オンラインでのアジア 4 国との日本語での文化交流研修を実現した. はじめに, この研修が大過なく修了できた前提としての成因を以下のとおり確認する.

① 協定校 FPT 大学とカウンターパートとして頻繁に連絡, 情報共有が計れたこと.
② 各大学のアカデミックカレンダーを考慮した隔週の週末に実施できたこと.
③ 参加各国がアジア圏であったため, 時差が±2 時間範囲内であったこと.
④ 日本語能力の高い日本語学科の学生の参加により 4 カ国でのグループ研修が実現できたこと.
⑤ 協定校 FPT 大学が, 日本語が話せる数名のコーディネーターを準備できたこと.
⑥ 渡航を伴う研修よりも安価な参加費により, グループ研修に十分な参加者の応募があったこと.
⑦ 2020 年 4 月より実施されたオンライン授業により, デジタル技術を活用した学習に対して学生の抵抗が少なかったこと.
⑧ オンラインによるリアルタイムおよびオンデマンドの事前教育により研修準備が実施できたこと.

特に①, ②, および③については, 海外の大学との研修をオンラインで実施する上で必須条件となり, 特に②, ③については, 複数の国々との研修において必ず調整が必要となることである.

さらに, ④, ⑤については, 日本語での研修を実施する場合の必要条件である. そして, ⑥はオンライン教育の経済的メリットであり, ⑦の IT リテラシーについては, コロナ禍でどの大学でも再認識され, 向上した能力であり, これからの学習形態の変化に大きな影響を与えるものと認識される.

⑧についても, 2020 年度からのオンライン授業によりリアルタイム, オンデマンドによる学習が定着していたので, 研修に参加するための準備作業を授業として実施できた. このことが, 研修の成功への大きな要素となっている.

これらの成因のもとに実現したオンライン国際交流研修は, 第 4 章調査に示すとおり, 相互の意見交換を主体としないプレゼンテーションや受講形式のプログラムについてはその有用性を確認できた. しかし, 他国のメンバーと意見や考え方を交換し, 相互に理解し合うプログラムにおいては, 課題を残していることも明確である.

これらから, オンラインでの文化交流研修は, いくつかの課題を残すもその有用性は確認され, コロナ禍が収束してからも研修形態と継続実施されていくと考えられる.

今回の経験から, 他国のメンバーと意見や考え方を交換し, 相互に理解し合うプログラムを実施する場合の施策を考察する.

(1) デジタル会議ツールによるコミュニケーションルー

©2021 Information Processing Society of Japan

ムの構築と活用

今回使用した MS Teams でも予め事前ミーティング用のルームが，各国混合グループにそれぞれ作成されていたが，MS Teams が初めての使用となる学生も多く，どのタイミングで，何のために，どのように利用するかが周知できていなかったために，十分な活用が得られなかった．ツールの使用方法について YouTube の URL を送付するのみならず，プログラムに準じて何を目的として，何をいつ話し合うかを周知し，活用することで，研修プログラムの共同作業もスムースにできてくると考える．

（2） 適切なグループコーディネーターの選出

今回の，特に混合グループの討議では，コーディネーターの進行に依存するところが大きく，日本語能力並びに討議を進行する上でのリードする力が重要な要素になっていた．そのため，研修ではコーディネーターの日本語能力が一律でないところで，グループ間格差がみられた．他言語での司会進行の難しさを鑑みると，日本人学生の有志または，適任者をコーディネーターとして予め選抜し，プログラムを準備するなどの工夫により，一層の改善が期待されるところが大きいと考えられる．

（3） プロジェクト型プログラムの導入

他国のメンバーとの混合グループで，今回は自己紹介等の“Sharing”など日常の身近なテーマを紹介し合う内容であったが，理解度では平均以上の評価を得られていない．これに代えて，テーマに基づき「共同で何かを制作する」プロジェクト型のプログラムを適用すれば，一定時間内の相互の意見交換が必要となり，他国学生とのコミュニケーションを促すことが期待できると考えられる．必要に応じて，関係者が研修中に関わらず研修前後に別途ルームで話し合うことで，考え方，習慣の違い等を感じ，理解しながら進めることができると提案する．

例えば，「4 カ国の学生が共通して受講できる授業リスト」や「どの国でも作れるアジア料理レシピ集」などである．

この場合は，ファシリテータにもプロジェクトを推進できるまでのレベルが必要であることを条件として添える．

（4） 従来型海外研修（対面）との併用

これは，予め海外文化交流研修を 2 部制とし，オンライン研修と従来型の対面研修を組み合わせて実施する方法である． 事前にオンラインで，プレゼンテーションや受講型のプログラムを主体として実施し，他国のメンバーと意見や考え方を交換しておいて，相互に理解し合うプロジェクト型プログラムを現地で行うという形態である．従来 2 週間の現地での対面研修を実施していた場合は，前半 1 週間オンラインとし，後半を対面で研修を行うなど，経済性と研修効果の双方から期待できる形態と考えられる．

6. おわりに

これからの国際交流研修は，従来型の現地渡航をともなう対面研修とオンライン研修の併用，またはデジタル技術を活用したオンライン研修を単独で実施する形態が拡大すると予想される[1].

今回の研修はコロナ禍での状況から前例の無い中での実施であったが，今回の研修のフィードバックを参考とすることで，デジタル技術を活用した新しい学修形態として，本学のみならず各大学においても，言語そのものの研修のみならず，文化交流や技術習得を含む海外研修，海外短期留学を検討されること期待する．

謝辞

本研修の企画，実施にあたり，ご一緒に推進頂いた FPT Global（現：FUNiX Japan.）の Ms. Thanh Nguyen，並びに皆様に感謝の意を表する．また本研究は，文教大学情報学部の共同研究費によって支援された．ここに感謝を申し上げる．

参考文献

[1] “コロナ禍を契機として考える今後の国際交流の在り方について”. https://www.janu.jp/wp/wp-content/uploads/2021/03/20210222-wnew-nextintlexch.pdf ,(参照 2021-06-10).

[2] “JETRO ビジネス短信 2020/01/31”. https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/01/b445759c59f3d2cd.html, (参照 2021-06-10).

[3] “茨木大学 グローバル教育センター”. http://cge.lae.ibaraki.ac.jp/study_abroad/shortterm.html, (参照 2021-06-10).

[4] “東北大学 グローバルラーニングセンター”. https://www.insc.tohoku.ac.jp/japanese/studyabroad/exploring/program/,(参照 2021-06-10).

[5] “大学等における新型コロナウィルス感染症への対応ガイドラインについて（周知）”. https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_5.pdf,(参照 2021-06-10).

[6] 小玉 安恵. オンラインによる異文化間協働型の日本文化の授業 COIL の試み -異文化間で活躍できる人材の育成をめざして- 日本語教育, 2018, Vol.169, pp. 93-108

[7] 赤崎美砂. オンライン授業の課題と可能性 - 異文化コミュニケーションの視点から -, 2021, 立教大学紀要 異文化コミュニケーション論集, pp. 109-119.

[8] “ポストコロナに向けた国際教育交流”. https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2020/__icsFiles/afieldfile/2021/03/05/202103shimmihoshinoota_2.pdf (参照 2021-06-10).

©2021 Information Processing Society of Japan